

「紫式部の憂鬱」―物語を紡ぎ出すということ―

愛知学院大学文学部日本文化学科 川名 淳子

二〇二四年十一月十二日（火）

※紫式部の憂鬱叙述

『紫式部日記』より

- まことのうちは、思ひあたることおほかり〔心の内は複雑なのだ〕
- めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心のひくかたのみつよくて、もの憂く、思わずに嘆かしきことのまさるぞ、いと苦しき。
- 身はいと苦しかなりと、思ひよそへらる。
- 高きまじらひも（宮仕えも）いとやすげなしかし。〔気が休まらない〕
- うとましの身
- 身の憂さ〔憂鬱感〕
- 思ひかけたりし思ひ

・行幸間近かの土御門邸 美しく整えられた邸内や庭、華やぐ道長邸の中での鬱屈
水鳥を水の上とやよそに見ぬわれも浮きたる世を過ぐしつ

（水鳥の樂しげなさまを、水の上のことで私には関係ないこととして見られようか。傍目には私もひなやかな宮仕えにうわついた日々を過ごしているのに）
・初宮仕え當時を思い起こし、現在の自身をうとましく思う
半盛れてわがよふけゆく風の音にこころのうちのすさまじきかな

（今年も暮れて私の齢も老いてゆく。折から吹いてゆく夜更けの風の音を聞いていると、心が寒々して寂しいことだ）

『紫式部集』より 身と心の相克

○寂ならぬ心に身をばまかせねど身にしたがるは心なりけり

我が心にこの身がゆだねられるわけではないが、ままならぬ身に従うのは、心の方なのだ。思い通りにはならない、外側の自分と自分の本心。

○心だにいかなる身にかかなふらむ思ひ相れども思ひ知られず

我が身自身を自分で自分をもてあます、ままならなさ

○身のうきは心のうちに暮ひきていま九重ぞ思ひ出るる

心の内の憂さと華やかな宮廷の狭間で私はさらに喘ぐ。身の厭わしさを自覚。

一条天皇の行幸が近づき、道長様は邸内をますます美しく飾り立てていらつしやる。きれいな菊を探して根から掘り起こし、土御門殿の庭に移植されているのだ。

白から紫へとりどりに色が移ろっているのも、黄色一色で見事なものもある。植え方に趣向の見えるものもある。朝霧の絶え間に見えるその光景、本当に老いも退散しそうなのだが、なぜなのだろう、私の心にはそうと感じられない。

もしも私がせいぜい世間並みのもの思いしか抱えていない人間だったなら、今以上に風流だの雅だのと浮かれ、無常なこの世を軽佻浮薄に過ごしたことだろう。だが現実の私は。素晴らしいことや素敵なことを見聞きするにつけても、ただ心を支配する思いばかりに引かされて、気が重く、苦みに適わず、溜息ばかりが募るのだ。それが本当に苦しい。今はもう、忘れてしまおう。悩んでも仕方がない。仏様の前、執着は罪深いことでもある。そう思つて、夜が明ければ溜息をついて、水鳥たちが無心に遊び合っているのを見る。

のんきそうな水鳥を、水の上だけのよそ事などとするものか。私もまた人から見れば豪華な職場で浮かれ、地に足のつかない生活をしているのだから。でも本当のところは水鳥の身の上だって大変なはずだ。私もそう、つらくて不安定な人生を過ごしているのだ。

水鳥もああして満足げに遊んでいると見えて、その実とても苦しいのだろう。今の私には、わが身に引きつけてそう感じられてしまうのだ。

行幸ちかくなりぬとて、殿のうちをいよいよよつくりみがかせ給ふ。世におもしろき菊の根をたづねつつ掘りてまゐる。色々うつろひたるも、黄なるが見どころあるも、さまざまに植ゑたてたるも、朝霧の絶え間に見渡したるは、げに老もしぞきめべき心地するに、なぞや。まいて、思ふことの少しもなのめなる身ならましかば、すきずきしくももてなし、若やきて、常なき世をもすすぐしてまし、めでたきこと、おもしろきことを見聞くにつけても、ただ思ひかけたりし心の引くかたのみ強くて、もの憂く、思はずに、嘆かしきことのまざるぞ、いと苦しき。いかで、いまはなほ物忘れしなむ、思ふ甲斐もなし、罪も深かくなりなど、明けたてばうちながめて、水鳥どもの思ふことなげに遊び合へるを見る。

水鳥を水の上とやよそに見むわれも浮きたる世をすすぐしつ

かれも、さこそ心をやりて遊ぶと見ゆれど、身はいとくるしかんなりと、思ひよ

※『紫式部日記』にみられる源氏物語の関する記事

★寛弘五年十一月一日 敦成親王誕生五十日の祝いの宴

藤原公任「このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」

紫式部 「源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上は、まいていかでものしたまはば、
と聞きぬたり」

当代を代表する文化人藤原公任が、『源氏物語』を読んでおり、その内容に関心を寄せていた。

光源氏に似ていそうな男などはないのに、どうして紫の上がこんなところにいましようか、と突っぱねた。

源氏物語はこの頃までに若紫巻までは確実に書かれていた。

紫の上が「上」と呼称される薄雲巻まで、または、玉鬘十帖までは書かれていたか。

…『源氏物語』の成立・評判・享受を伝える。

★寛弘五年十一月十七日 彰子中宮内裏遷啓に向けて 帝への贈物

物語の冊子作り 道長が料紙・筆・墨・硯を用意

紫式部が中心になって行われた書写・製本作業

…『源氏物語』作者としての立場

道長が式部の局から物語の草稿本を持ち出し、彰子の妹内侍督妍子に。

…新作の源氏物語が待望されていた。

源氏物語には、草稿本・改訂本・清書本が存在した。

道長が源氏物語の製作に深く関与。

★消息文的部分 一条天皇の賞讃

「一条天皇「源氏の物語」を女房に音読させて聞いていた時のことば
「うちの上の、源氏の物語、人に読ませたまひつつ聞こしめしける」

「この人は日本紀をこそ讀みたるべけれ。まことに^{きま}あるべし」

…紫式部への賞讃

源氏物語の作者は歴史書をしつかり読んでる学問のできる人だ。

「源氏の物語」という具体的書名が初めて出てくる場面

帝が読む↓源氏物語の權威づけ

「日本紀の御局」というあだ名をつけられる。

周囲の女房たちの式部への嫉妬

物語作家としての試練

宮仕えへの憂鬱

★寛弘五年初夏か。道長の、源氏物語の作者たる式部への戯れ

中宮彰子の御前に「源氏の物語」があるのを道長が見て、「冗談口をたたきながら、梅の実に敷かれていた紙に、

「すきものと名にし立てれば見る人の祈らで過ぐるはあらじと思ふ」

源氏物語のような好色な物語を書いたあなたは好き者（酸きもの）と して評判だから見過ごす男はいないだろう、と書き、歌を読みかける。

「人にまだ祈られぬものをたれかこのすきものでは口ならしけむ」

まだ誰にも身を許したことがないのに、いあつたい誰が好き者なんて言うのでしょうか、と式部は反発。
道長と思われる男の訪問

…源氏物語の評判、源氏物語の作者への関心

「光源氏の心の（かたち）」

1 成立

『源氏物語』の成立 約千年前 平安時代中頃 一〇〇八年頃

「源氏物語絵巻」（徳川美術館・五島美術館蔵）平安時代末 一二世紀中頃（一二四〇年代か？）

2 物語文学と絵画

物語絵を見ながら物語世界を鑑賞

二次創作物としての絵を通して物語世界を楽しむ 源氏絵の量産。

絵という二次元の世界

どのように物語の情趣・登場人物の心情・季節や舞台のあり方を盛り込むか？

国宝「源氏物語絵巻」の「柏木」（三）の絵を取り上げ、物語と絵の相関を考える。

3 光源氏の述懐

自分の人生は幸せなものではなかったと言う光源氏。自己の人生を反芻。

○自分は幼い頃から普通の人と異なつた身の上で、（帝の子として）特別な扱いを受けて育つたし、現在、世間から重んぜられる点でも、また日々の暮らし向きということでも、たいそうな榮譽を得ていて不足はないと思われているであろう。

（この時、源氏は大条院という極楽浄土を思わせる大邸宅に住み、准太上天皇という天皇につぐ最高の位を得ていた。）

○しかし一方で、自分は、世にまたとないくらい悲しい目に遭うことも人並み外れてのものであった。

○私を大切に思ってくれた人々に次々と死に別れ、あとに取り残されてしまったことが、第一につらいことであつた。

歳をとつても、心に飽かぬ思ひをかかえ満ち足りた気持ちになることはない。

○思いもよらぬ悲しいこと、意にそまぬことが次々あつて、人生であつたから、その代償として自分は、この歳まで生き長らえているのである。 [若菜卷下]

○昔からわが身の半生を振り返ってみると鏡に映る姿をはじめとして他の人を超越した身ではあつたが、幼い時から、悲しく無常の世を感じることが多く：

○この世に生きてきたことにつけて不満に思うようなことはほとんどないほど、高い身分に生まれつきながら、一方では世間の人よりも格別に下本意な身の上にめぐり合わせたとすることも絶えないのだ。

おそらく、世の中は無常で厭わしいものだと悟るやうにと、仏がお仕向けになつた我が身なのであろう。

No. 3



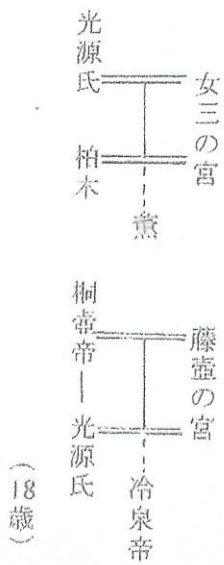
4 絵巻の画面 「柏木」(三)

源氏47歳 正妻女三の宮が柏木と通じて生まれた薫を我が子として披露(五十日の祝い)する場面

「幻巻」

- ・ 急角度の吹抜屋台の構図
- ・ 画面中央には描かれない源氏
- ・ 窮屈な姿勢の源氏
- ・ くり返される斜線構図
- ・ 密通(薫の出生の秘密)を知る者と知らぬ者の混在
- ・ 反復される罪の応酬
- ・ 「似ている」ことへの恐れ

5 系図



6

描き直された画面

修正から考察し得る絵巻制作者の物語解釈

つくり絵の手法

7

源氏の心情

○「故院（桐壺帝）の上も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ。思へば、その世の事こそは、いと恐ろしくあるまじき過ちなりけれ」

（父上も今の自分と同じく、御心のうちでは「藤壺とのことを」ご承知でいらしゃって、「藤壺のことも源氏のこととも皇子のこととも愛するがゆえに」知らぬふりをしておいでになったのであらうか。思えば、あのころのことは、まったく恐ろしく、あるべからざる過ちであった）
源氏は、今さらながら、亡き父の本当の心の内に思い至る。

○「あはれ。残り少なき世に生ひ出づべき人にこそ」（ああなんと私の命も残り少なくな
いこの歳になって、今から育つていこうとする人よ）と言って、源氏は薫を抱きしめる。
その薫は愛らしく、
「この君（薫）、いとあて（上品）なるに添へて、愛敬づき（愛くるしく）、まなのかを
りて（日もとがつかややかで）、笑がちなるなどをあはれと（いとおしい）と元たまか。
と、源氏はじつと見入る。

○柏木は、薫誕生直後に亡くなった。源氏が事の次第を知ったということに密かに柏木は
知り、源氏に、にらまれてはもはや生きていけないと思いつつ、病に伏し、「泡が消える

ように「死んでしまった。女二の宮も、源氏と夫婦でいることがつらく、出家。結局、この男女は、^{おさなご}幼子を残し、自分たちの人生を自ら閉じた。

源氏は、薫の美質を認めつつ、いっぽうで

「思ひなしにや（柏木の子と思ってみるせい）か、をほいしようおぼえたりかし。（やはり似ている…）」と柏木のことを思う。こんな愛らしい子を残して自滅の道をたどった柏木を許しがたくも、

「あはれ、はかなかりける人の契りかな」（あぁなんとはかなかつたあの人（柏木）の運命よ）と思い、一人涙する。

今日は、祝いの席だから、涙は禁物と思いつつ、源氏は、やりきれない思いをかかえて密かに泣く。（源氏は、柏木をその幼少期から息子夕霧と同様に目をかけ大事にしてきた。）

○源氏は、白楽天の漢詩にことよせて自嘲的に、薫に「^{ちち}汝が爺に」と^{いさ}疎めまほしう思しけむかし」（お前は父と同じような生き方をするのではないぞ）と心中でそつといさめる。「父」とは柏木であり、自分自身でもあるのであろう。

描かれた薫 ← 源氏の人生・源氏の罪を重く問う存在

源氏は以後、秘密を胸に薫を我が子として育ててゆく。

（絵を回転させてみる）



柏木を

見舞う夕霧

「柏木」(二)

柏木の死

引目鉤鼻：鑑賞者の感情移入によって、立ち上がってくる表情。

★絵巻を鑑賞しつつ、物語の真意を探る。

画像掲載出典：日本絵巻大成1「源氏物語絵巻・寝覚物語絵巻」中央公論社 昭和61年

「源氏物語の鑑賞と基礎知識」柏木 至文堂 平成13年